様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３３９１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７５０２５７

研究課題名（和文）教師の体育授業に関わる職能の発達に向けた取り組みを促す要因の検討

研究課題名（英文）Factors enhancing teachers' continuing development for teaching physical education

研究代表者
四方田　健二（Yomoda, Kenji）

名古屋学院大学・スポーツ健康科学部・講師

研究者番号：２０７１１４０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師が研修や授業研究コミュニティへの参加を通してどのように体育授業に関わる職能の向上に対する取り組みが促されるかを検討することを目的とした。体育科の研修に参加する教師を対象に、インタビュー、質問紙、資料、参与観察により主として質的データを収集、分析した。その結果、教師の体育授業観や教師観などの個人的要因、研修への参加機会や先輩教師からの誘い、職場での役割期待などの外的要因、児童生徒の授業へ取り組む様子の省察などの要因が存在することが示唆された。これらの要因は相互に複雑に関係していた。他方で、多忙さや同僚教師の体育授業への関心の低さが体育授業研究への阻害要因となることが示された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to examine the factors affecting teachers’ continuing development for teaching Physical Education. Qualitative data were collected from semi-structured interviews, questionnaires, documents, observations of teachers participated in a long-term training program and lesson study communities for teaching Physical Education. Qualitative data analysis revealed following factors enhancing teachers' commitment to teaching Physical Education: 1) workplace environment and learning opportunities (support from other teachers, role expectation, and opportunities for participation in training programs), 2) teachers' belief in physical education (perception of its educational value and teaching viewpoint), and 3) reflective factors (observation of students and efficacy of teaching). In addition, the relationships among mutual categories and commitment suggested the importance of teachers' reflective practices through confirmation of students’ learning.

研究分野：体育科教育学

キーワード：体育授業　教師教育　CPD　授業研究

１．研究開始当初の背景

近年の英語圏の体育科の教師教育研究では、教師の体育授業に関わる職能の生涯を通した発達（CPD）に関する研究が盛んに行われ、その中で教師の信念や省察といった内面的要因と研修や同僚教師といった環境的要因がCPDに影響することが報告されてきた。また、自発的な教師コミュニティにおける協働を通した発達が教師の授業力量向上への意欲に影響し CPD を促すことが報告されてきた。しかし、どのような研修や教師コミュニティが教師の CPD を効果的に促すかについては、十分な知見が得られていない。

他方で、我が国の体育科教育学研究分野における教師教育に関する研究においては、体育授業に関わる教師の成長プロセスに関する研究の蓄積が乏しい。そこで、申請者らは、小学校教師の体育授業の改善に対する取り組みについて調査を行ってきた。例えば、大学での長期研修に参加した小学校教師の体育授業に対するコミットメントを促してきた要因について検討してきた。また、長年にわたり体育の校内授業研究を行ってきた小学校での参与観察を通して、新人教師が感じる成果や課題を明らかにしてきた。

しかし、未だ事例が少ないのが現状である。実際、特定の小学校教師の事例を調査したが、このような事例研究は、目的的サンプリングにより、研究テーマに適した特異的な対象者をサンプリングする必要がある。すなわち、教師の信念やコミュニティの成果といった、教師の内面や複雑な要因の関わる概念の研究を行うためには、異なった多様な属性の対象者から情報を収集する必要がある。中学校、高校の体育教師や長期間の研修及び自発的な授業研究コミュニティといった事例からも教師の CPD に対する取り組みを検討することは、これまでの事例研究の不備を補足する点で意義があるといえる。本研究計画は、こうした事例研究を積み重ねることで、体育授業に関わる職能の向上に向けた教師の積極的な取り組みを効果的に促す研修プログラム開発の根拠を蓄積できる点で、我が国の当分野の研究の促進に貢献することが期待される。

２．研究の目的

本研究は、教師が研修や授業研究コミュニティへの参加を通してどのように体育授業に関わる職能の向上に対する取り組みが促されるかを検討することを目的とした。

３．研究の方法

我が国の体育科の教師教育研究では、研究方法論が未発達といえる。研究の遂行のため、まず、体育科の教師教育分野における研究方法を検討した。近年の英語圏の体育科教師教育研究における研究方法の動向を調査するとともに、教師の授業観を検証する質問紙の日本語版を作成し検討した。

本研究課題について、体育科の研修に参加する教師を対象に、インタビュー、質問紙、資料、参与観察を行い、主に質的データを収集した。調査の観点は、(1) 教師の参加動機および（2）参加を通した体育授業の指導観や教師観の変容過程を調査した。また、(3) 長期研修に参加し学校現場に戻った教師が研修の成果の発揮に関してどのように取り組んでいるか、どのような成果や課題を感じているかなどである。

４．研究成果

(1) 研究方法の検討

① 研究方法論の動向

まず、体育科教育学分野の英文学術誌における体育科教師教育研究に関する論文の研究方法の動向を検証した。2002 年から 2011 年までの 10 年間の英文学術誌 5 誌に掲載された 102 編の論文を対象とし、対象論文で用いられた研究方法を分類した。分析観点は、研究アプローチの種別、対象者の属性、データ収集方法と分析方法、信頼性・妥当性確保の方略である。各分類項目の記述がみられた比率を 2006 年までの 5 年間と 2007 年以降の 5 年間とで比較した。また、各論文で用いられた質的データ収集方法の種類についても対象期間の前半後半 5 年間で比較した。

分析の結果、質的研究法を用いた論文が近年の主要な研究方法となっていたことが示された。また、2007 年以降の論文では質的データ収集方法が多様化し、トライアンギュレーションを用いた論文が増加していたことが明らかとなった。質的データを用いた論文のうち信頼性・妥当性確保の方略が記述される論文の割合が 2007 年以降に有意に増加していた。加えて、小学校教師や初等教員養成課程の学生を対象とした論文の比率が低いことも示された。

研究方法の動向の変化は、研究方法論の発展に伴うものであったと考えられる。我が国の当分野の将来の研究の重要な課題として、探索的な質的研究の蓄積、データ、調査者及び方法のトライアンギュレーションを始めとする、信頼性・妥当性の確保のための手法の適切な適用及び記述、研究の問いに対応した適切な研究方法の選択が挙げられる。

② 体育授業観に関する質問紙の検討

教師の体育授業観の調査項目として、Teacher’s Attitudes toward Teaching Physical Activity and Fitness (Kulinna and Silverman, 1999)の日本語版を作成し我が国の対象者に実施した。英文の原文の質問項目を日本語に訳し、校閲業者による英文へのバックトランスレーションを行った上で原文と内容を比較検討し、日本語版を作成した。対象者は大学の保健体育科教員養成課程に在籍する学生 358 名とした。運動参加及び体力の向上、運動技能の発達、自己実現、社会性の発達の 4 つのカテゴリーの相対的な重要

性の認識を示すことができた。ただし、知識・理解や思考・判断の内容がないこと、重要性の認識の回答の平均値が高く、天井効果が生じることが課題といえる。カテゴリー間や対象者集団間の比較は慎重に行う必要がある。以上を踏まえると、同一対象者を縦断的に長期的に調査することで、授業観の変化を捉えるなどの活用が考えられる。

(2) 教師の体育授業研究への取り組みを促す要因

教師の体育科の授業研究を促す契機として、多様な要因が相互に関係していることが示された。個人的要因、外的要因、授業の省察の 3 つに整理できる。

① 個人的要因

個人的要因には、教師の体育授業の指導観や教師観が含まれる。教師は、体育授業の教育的価値を、児童生徒の姿から重視するようになり、積極的な授業への取り組みが促されていた。児童の喜ぶ姿や成長する姿を実感することで、体育指導のやりがいや効力感も重要といえる。

小学校では、体育授業を通して、担任としての学級の児童を成長させる、学級でその姿を見る機会も多い。一方、中学校・高等学校の保健体育教師は、むしろ多くの時間を共にする部活動で人間形成を重視し、その成長を実感しやすいと考えられる。

② 授業の省察

児童生徒の体育授業における肯定的反応により、指導のやりがいや教育的価値の認識が促される。一方、子どものネガティブな授業への反応であっても、授業改善のイメージができる場合や、サポートを求められる環境にいると、授業改善への意欲へとつながる。

③ 外的要因

外的要因として、まず、同僚や先輩教師からの支援が強く影響を与えていた。これは、中学校・高等学校の保健体育教師でも同様であることは既に多く指摘されている。ただし、学校内で相談できる同僚教師がいないという声が聞かれ、中学校・高等学校の保健体育教師にも同様の問題があるといえる。実際、保健体育教師が学校内で孤立してしまう「疎外」という現象も問題として指摘されてきた。加えて、学校内で体育の種目指導が分担され、種目指導に関する相談が難しいという現状も考えられる。次に、職場での役割期待では、男性の教師に対する体育指導の役割を期待されることが強く影響していた。この役割期待が、教科担任制ではない小学校教師の体育指導の専門意識を促していた。

研修への参加機会も、授業研究への取り組みの契機として挙げられた。授業研究に参加して理想とする授業に出合ったり、授業提案をしたりする機会などを通して、授業研究コミュニティに関わるようになる。

(3) 体育授業への積極的な取り組みを阻害する要因

教師の職場環境はさまざまであるし、同じ職場環境や研修の経験を経ても、必ずしも体育授業への積極的な取り組みにつながるわけではない。また、授業への取り組みの意欲は、常に直線的に高まるわけではなく、その継続が困難となることも多くある。よって、体育授業への積極的な取り組みを阻害する要因についても検討しておく必要がある。筆者らの研究では、先に挙げた同僚教師や職場環境、教師の抱く体育授業の目標観や効力感などが、場合によっては授業への取り組みを阻害する要因としても働くことが示された。

① 学校内での体育の地位と職場風土

教師の置かれた環境が、体育の目標が重視される学校であり、同僚教師に協力を求められる場合ばかりではない。実際、体育の授業研究サークルでは活発に意見交換できる教師が、学校内では体育について熱く語れる同僚がいないと語ることがある。また、自身が体育授業に関して専門性を高めていても、学校内の同僚教師の体育授業に意見を言うことは難しいという声も聞かれる。このことに関して、我が国に特有の「同調的職場風土」の存在が指摘されている。これは、教師間で多様な視点から意見を述べたり目立った行動をとることが難しい雰囲気であり、一見職場のまとまりがあるようでも、創造的な活動が生じにくいという。

② 不明瞭な体育授業の目標観

体育には教科書がなく、教師が授業で何を学ばせるかという目標観が不明確になり、授業づくりへの取り組みが停滞していることも課題である。小学校教師に体育が重視されていないという声が聞かれる一方、小学校教師の 90%以上が体育授業を大切だと考えているという調査結果もある。このギャップは、一定数の教師は、体育を「体力向上のために大切である」、「気晴らしとして大切である」と「大切」だと考えてはいるが、具体的に体育の学習内容について深く捉えられていないことを反映していると考えられる。体育は気晴らしであるとか、スポーツ種目をそのまま行えば良いという授業観を持っている教師は、教材の工夫を試行錯誤することはないだろう。さらに、教師の体育授業の目標観の不明確さは、授業の質を低下させるばかりか、体育に積極的に取り組む教師の学校内での活躍の場をも阻害してしまう問題も生じさせている。

③ 体育の教育的価値の認識と無力感

教師の授業への取り組みの意欲が継続できるかどうかについて、動機づけ理論からも解釈が可能だろう。動機づけ理論では、「価

値」と「期待」が両輪とされている。つまり、体育授業の教育的「価値」を認識するかどうか、また、教師自身が授業の成果を高めることができるという期待（効力感）を持っているかが、動機づけを高められるか否かの鍵といえる。これを踏まえると、体育授業の価値を高く評価し、授業成果を高めたいと感じていても、教師自身の運動への苦手意識や、広い場所で児童を動かすことを難しく感じることで、効力感が低下し授業づくりから遠ざかってしまう教師への支援が必要であろう。

④　多忙さを踏まえたインフォーマルな学び合い

これらの授業への取り組みの阻害要因の根底には、教師の多忙さがある。多忙さゆえに現状を変えるような意見交換が難しく同調的な職場風土になってしまったり、体育授業の準備や教材研究の負担を感じ、目標観の不明確さや自信の低下につながったりもする。

そのため、体育の学習内容の理解や指導技術の習得のための研修を増やすことは、教師の時間的負担を考えると大幅な変化は難しい。むしろ、公的な研修の増加は自発的な研修や学校内での同僚教師との日常的なインフォーマルな学び合いの機会を減少させていることも指摘されている。教師への支援は、日々のインフォーマルな学び合いをベースとして、教師の負担が軽減され、自己研修や教材研究、児童と向き合う時間が増すようなものであることが求められる。体育に関しては、教材や教具を学級間、学年間で共有すること、場の準備・片付けの負担を減らす時間割の工夫も一つの支援的な働きかけの例であろう。校内研修や講習の機会があれば、フォローアップで実際に取り組んでみた際の課題についてのサポートも重要となる。校内授業研究においても、報告書をまとめることや公開研究会で発表することが最終目標ではなく、そこに向けた日々の教師間の協働が促され、公開後にも互いの授業実践についての学び合いが継続することに価値が置かれたい。

⑤　要因間の関係

要因間の関係は、教師の授業への取り組みの促進は、一直線ではないこと、多様な経験が影響していること、またそれらが相互に関係していることを示していた。つまり、単に研修や仕事を任せるのではなく、相談できる環境を整えたうえで、授業者としての教師観への変容を促すことが必要といえる。

過去、海外の教師教育研究では、教師の成長プロセスやその要因の特定を試みる研究が行われてきた。その結論は、教師の成長の契機は多様であり、全ての教師に効果的な支援やプロセスは存在せず、個別性、多様性を認めるという合意に至っている。筆者らの研究でも、ある程度共通した要因があるとはいえ、体育授業に積極的に取り組む教師は、豊かで多様な経験を経て阻害要因を克服しつつその取り組みを継続していることが示された。そして、先に挙げたような要因（促進、阻害いずれも）は単独で作用するのではなく、複雑に関係し合いスパイラル的に働く。体育授業を重視し成果を高めたいがために学校内外の教師との協働を自発的に求め、その影響を受け授業実践が変容し、児童の学びからやりがいや達成感を感じる。一方、体育授業の学習成果が高まらず、指導の苦手意識を感じれば、同僚教師との体育の対話からもより遠ざかってしまい、相談できる環境も失ってしまう。

(4) 総括

最後に、今後の検討課題として、まず、教師に対する支援の必要性を指摘したい。体育授業へのモチベーションを高めるポジティブな経験を多く積んできた。偶然に任せるのではなく、意図的に支援が必要といえる。
小学校教師の環境や教師観と、中学校・高等学校の保健体育教師のそれは、異なることを踏まえ、支援を行う必要がある。また、教師の信念のみではなく、教師の個人的努力では解決が困難な環境的側面も、授業への取り組みに大きな影響を与えている。学校内での教師同士、大学、教育委員会との協働的な支援について検討が必要といえる。この際、授業研究や教職実践演習などの機会を通して意図的に協力体制を整えていくことや、それぞれの専門性を活かした双方向の協力体制が求められると考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

四方田健二・須甲理生・岡出美則，英文学術誌掲載論文における体育科教師教育研究の研究方法の動向：2002 年―2011 年の 10 年間を対象として. 体育学研究, 60(1)：283-301, 2015.（査読有）

四方田健二，小学校教師の体育授業への積極的な取り組みを促す要因．体育科教育，62（7）：42-45，2014.（査読無）

〔学会発表〕（計　1 件）

Kenji Yomoda, Riki Suko, Preservice Physical Education Teachers' Perception toward Learning Outcomes in Physical Education and Relationships with Prior Experiences. The 2015 International Conference of the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport, 2016.9.19, 日本体育大学（東京都・世田谷区）

６．研究組織

(1)研究代表者
四方田 健二（YOMODA, Kenji）
名古屋学院大学・スポーツ健康学部・講師
研究者番号：20711401